



山鼻記念碑保存資産 広報 Vol.2

平成26年4月10日
発行所 一般財団法人 山鼻記念碑保存資産

平成26年度記念式典

平成26年6月22日(日)13時 山鼻公園

山鼻地区在住の方多数参加で地区の行事として

記念式典

平成二六年度山鼻兵村開設記念式典は、例年のとおり六月第四日曜日、平成二六年六月二二日(日)午後一時、札幌市南一四条西一〇丁目山鼻公園にて、一般財団法人山鼻記念碑保存資産の主催で開催いたします。ご遺族のみならず、ご親族、ご近所もお誘い合わせのうえ、多数のご出席をお待ち申し上げます。

例年五月末、兵員名簿をもとに、案内状を発送いたします。この名簿は、初代二四〇名と、その後継者が記載されており、昨年は、所在確認の出来る方一三三名に案内状を発送いたしました。つまり、居所不明となっている方が一〇七名となっております。不明となる要因は、名簿記載継承時に財団までご連絡いただけなかったこと、継承時には必ずご連絡くださいますようお願い申し上げます。

現在の名簿で、札幌市内在住者は一〇四名。現存の初代からの遺族が平均五名とすると、五二〇名。昨年の参加者は、名簿記載者と、その同伴者で、八七名。名簿記載の札幌在住者数からは、少ない数ではありませんが、道内、道外からも多くご参列を望むところ。また、名簿記載者のみならず、記載されていない関係ご遺族にも、多く参加していただき、盛大な式典といたしたいと思っております。

初代が山鼻に入植してから一三八年、七代目、八代目が山鼻小学校という方もいらっしゃいます。当初は、山鼻小学校の生徒も、学校の行事、地域の行事として、この式典に参加してまいりました。屯田関係者のみならず、ご遺族が隣近所もお誘いして、参加者を増加させることにより、この式典が山鼻地区の行事として根付かせたいと考えています。それが、財団の目的である

る記念式典の開催の本来の趣旨に合うこと。ご理解をお願いいたします。

展示室

最近、展示室を、特定の目的をもって訪れる方が増加しています。特に定年退職者で、幕末から明治の歴史を研究されている方です。戊辰戦争、屯田兵制度、西南の役、日清戦争、日露戦争、第七師団等の資料を求めて来館されます。

八〇年記念誌と、一二〇年記念誌第一部をご紹介します。八〇年誌は在庫がありませんので、図書館の利用をお勧めしています。一二〇年誌は在庫がありますので、希望者には販売しています。また、文字興しをしましたので、A4版三二ページのコピーを有料で配布します。

一二〇年誌総論を連載

山鼻屯田兵村開村一二〇年誌第一部総論屯田兵と山鼻を、広報②号から広報⑤号まで四回に分割し、連載します。幕末までの北海道と世界情勢、幕末の東北諸藩の動静、山鼻屯田兵の入植、西南の役

と山鼻屯田等が耽々と描かれています。明治、大正、昭和の山鼻の歴史を再認識することが出来ることと思っております。

広報② 平成二六年四月

- 一 屯田とは
- 二 屯田兵が入植する以前の歴史
- 三 北方の脅威といわれたロシアの状況
- 四 ロシアの南下に対する幕府の対応
- 五 幕末における東北諸藩
- 六 北海道の夜明け
- 七 屯田兵制度のはじまり
- 八 山鼻屯田兵入植
- 九 「西南戦争」と山鼻屯田兵
- 一〇 「西南戦争」と東北
- 一一 屯田兵を支えた女性たち
- 一二 屯田兵の土地と服務
- 一三 屯田兵の出征
- 一四 第七師団について
- 一五 山鼻地区の変遷
- 一六 暮らしの変化
- 一七 戦後の山鼻
- 一八 現在の山鼻

一 屯田とは

・屯田の歴史は

漢の武帝から

今からおよそ二二〇〇年前、支那（現・中国）の漢の武帝（前一四一年〜前八七年）が、匈奴を破って、辺境の地の警備に「田卒」という制度をもつた。それを「屯田」と呼んだのが始まりである。

武帝は、張騫（チョウケン）を西域に派遣し、河西四郡に「田卒」をおいて匈奴の侵入に備える。「田卒」は、平時には開墾しながら警備の任に当り、有事の際には、兵となつて軍役に服した。

帝政ロシアでも、その方法を用いたのが「コザック」である。「コザック」というのは英語よみで、ロシア語では「カザーク」という…この「カザーク」は、ロシア社会に存在した異形の集団で、本来、ロシア体制からの自由な逃亡者だった。

彼等は、その剽悍さと狡猾さをもつて帝政ロシアの先兵となりシベリアをロシア領として皇帝に献上する役目を担った。この「カザーク」（コザック）も一種の屯田である。

日本では、薩摩藩の郷士が同じような制度を早くから実施している。

従つて、「屯田」という制度、もしくは、その役割そのものの歴史は大変古い。

二 屯田兵が入植する以前の歴史

・アイヌ民族との抗争を繰り返す

（一）その昔、北海道は蝦夷地と呼ばれていた。蝦夷というのはアイヌのこと、従つて「蝦夷地」とは、「アイヌの住む土地」という意味である。

文献記録の上で蝦夷地が登場するのは、斉明天皇四年（六五八年）、「阿倍比羅夫の遠征記事」を記述した、日本書記からである。阿倍比羅夫が、斉明四年（六五八年）、軍船一八〇隻を率いて蝦夷討伐を三次にわたつて行い、渡島地方のアイヌを討伐し服従させて和人の定住を安定させた。

以後、蝦夷地（但し、渡島地方近辺のみ）は、アイヌ民族と和人（大和民族）の共存地となった。

（二）鎌倉幕府、足利幕府の頃（一〇〇〇〜一四〇〇年）は、蝦夷地は、罪人の流刑場として海賊や強盗の類が流罪として放逐されている。また、そういう徒の取締りとして津軽の安東氏が、蝦夷地守護の任を命じられている。

（三）アイヌ民族と大和民族の共存地とはいえ、それぞれ利害得失からさまざまな軋轢が内在していた。

康正二年（一四五六）年、鶴川と余市でアイヌ民族が蜂起し和人を殺害するという事件が起る。

翌年の長慶元年（一四五七年）、東部アイヌの酋長コシヤメインが蜂起し、和人が全滅の危機に瀕した。

武田信広は、この戦さの功により、蠣崎氏を継承し蠣崎信広となっている。

（四）永正十一年（一五一四年）、蠣崎光広は、大館（現在の松前）に徳山館を修築し安東氏の代官となつて、正式に蝦夷地の管理者となった。

しかし、一六世紀の前半は、たびたびアイヌ民族酋長の蜂起があつて来攻をうけ、その都度、討伐と平定を繰り返す。

（五）天正一八年（一五九〇年）、蠣崎慶広は、豊臣秀吉に謁見、次いで、文禄二年（一五九三年）秀吉より蝦夷島主と認められて、志摩守に任ぜられた。秀吉没後の慶長四年（一五九九年）、蠣崎慶広は徳川家康と会見し、姓を「松前」と改める。

（六）寛文九年（一六六九年）、松前泰広の時、アイヌ民族のシヤクシャインが、蝦夷地の全アイヌに和人撃滅の概を飛ばして蜂起、一大決戦に及んだ。

この戦いから、以後アイヌ民族の蜂起は少なくなつていった。

・ロシア人の出現と

関わりあい

（七）松前藩の藩士が、厚岸で初めてロシア人の千島進出を耳にしたのは宝暦九年（一七五九年）のことである。

しかし、藩士の報告を受けた松前藩は、なぜかこの件を幕府に伝えていない。

松前藩が正式にロシア人の南下を幕府に伝えたのは、一二年後の明和三年（一七七二年）のことであった。

（八）安永七年（一七七八年）、ウルップ島からロシア人が根室に來航し交易を要請する。松前藩は即答できないとし、幕府と相談の上、明年に解答することを約束した。

の関係は、最も身近な隣国でありながら、互いに正しい理解を得られないまま、誤解と曲解、行き違いを繰り返し、明治維新を迎えることになる。

三 北方の脅威といわれたロシアの状況

・アジア遊牧民族に

侵略されたロシア平原

(一)人類の文明史から見て、ロシア人によるロシアの国は極めて若い国である……ということを重ねなければならぬ。

ロシア国の決定的な成立は、一五世紀だということだ。若い分だけ国家としては猛々しい野性を持っているといっている。

ロシアの場合、それ以前の時代、常に東方から侵略してくるアジア系の遊牧民族の絶好の草原だった。

古代の匈奴、アッテラ大王のフン族など、いつの時代でもアジア人の侵略に蹂躪されている。

い抗し切れるものではなかった。

少しづつ都市になりつつあったモスクワは破壊され、ロシア人は虐殺されつくした。その上、モンゴルは、ロシア平原に居すわってキプチャク汗国(一二四三―一五〇二年)を建国し、ロシア人を農奴として搾取する。以後、タタールのくびき……といわれる暴力支配の時代が二五九年間つづいたのである。

・イヴァン雷帝の統一

(二)キプチャク汗国が自壊し、いくつかのロシア公国の中でモスクワ公国の勢力が頭角を現わす。

一五三三年、有名なイヴァン四世(雷帝)が即位し、強烈な独裁的指導を発揮するに及んで、のちのロシア国家の基礎が出来上がる。

イヴァン雷帝は、士族団を掌握して「タタールくびき」以来の農奴を支配してきた大貴族達の勢力をおさえ、各地に軍事的成功をおさめ、かつ一方では西方との交流を図り、貿易業者を保護し、西方の兵器を輸入した。

イヴァン雷帝は、自ら「皇帝(ツァーリ)(カエサル)」と称して絶大な権力をもった。

そして、キプチャク汗国の残余として存在していた幾つかの遊牧国家を滅ぼすか服従させる。ただ、東方にいたシルビ汗国だけは別だった。

イヴァン雷帝にしてみればシルビ汗国は目の上のタンコブ。東方の大森林地帯の資源(特に黒貂の毛皮)を得るためにはシルビ汗国を滅ぼさなければ国益につながらぬ。

着目したのが、辺境で活動していたストロゴノフ家。グリゴリー・ストロゴノフは、毛皮商人として、また、製塩業者、開拓企業家として既に大きな存在だった。

このストロゴノフから「私どもの手でシルビ汗国を倒した……」と、イヴァン雷帝に許可を求めてきた。イヴァン雷帝は、この申入れを許可し、さらに巨額の特権を付与した。特権とは武装兵を保有する権利と、攻撃のための城塞をつくる権利であった。一五七四年五月、シベリア略取への号砲が放たれたのである。

日本史でいえば、その翌年、織田信長が鉄砲軍団をもって武田勝頼を長篠に破った年だった。

・コザックがロシアの先兵

(三)ストロゴノフ家が、シルビ汗国攻略の先兵としたのが、当時、ロシア公国から死刑を宣告され逃亡していたコザック(カザーク)の首長イエルマーク。

ストロゴノフは、イエルマークにイヴァン雷帝の親書をみせ、攻撃隊の総大将は、ストロゴノフ家の傭兵隊長であることと同時に皇帝の手足であり、官軍でもある……と説得、

むろん、死刑は取り消される……と説明し協力を求めた。

イエルマークは承知した。勇敢なコザックの首長イエルマークは、わずか五〇〇騎のコザックをひきつれ東方をめざした。一五八一年のことである。コロンブスの最初の航海よりも八九年後のことである。イエルマークにしてみれば、たとえシルビ汗国を倒せなくても毛皮を奪うだけでも十分だと思っていたらしい。ところが、汗の兵と戦闘を重

ねているうちに、――タタールは以外に弱い――ということに気付いた。

信じ難いことだが、一五八一年秋に征途にのぼったイエルマークは、わずか二年後の秋、激戦の末、シルビ汗国の都「イスケル」を陥し、その地を占領したのである。

ストロゴノフ家とコザック首長は、新たに広がったロシア領を皇帝に献上した。

皇帝は、イエルマークだけでなく、その配下を含めて赦免し、その上、皇帝自信の着用していた甲冑をイエルマークに与えている。

・シベリアの征服

(五)それまでのロシア人の居住世界は存外狭いものだった。ウラル山脈を壁として、その山麓から西がロシアであるに過ぎなかった。シルビ汗国という長大な壁が倒れてはじめて、ロシア人の現実の地理的世界としてシベリアが湧出した……といっている。

冒険的なコザックを中心とする任意の征服者たちが、あらそってシベリア征服に乗り出し、城塞をつくり、原住民を

抑圧し、黒貂を取り上げ、それを買う商人たちが奥地へ奥地へと入っていった。

コザツクは、シベリアの一地域を占領すると、イエルマールクの先例にならない、その都度、その地をモスクワの皇帝に献上しつづ、東へ東へと進んでいったのである。

ロシアの勢力がシベリアの東端に達するのは、イエルマールクがシルビ汗国の残党のワナにかかってイルティシユ川で水死してからわずか六三年後の一六四八年のことであった。

・カムチャツカ半島を発見

(六)シベリア大陸の東端に、南に向かつてぶら下っている巨大な半島―カムチャツカ半島―があることを見つけたのはコザツクの五十人長(百人長、五十人長という区分はモングル帝国の遺した文化的遺産の一つ)アトウラソフである。

このアトウラソフこそ、ロシア皇帝ピョートル大帝にカムチャツカ半島の領有を確実なものにさせた男なのだ。

一六九五年八月、アトウラソフはロシア皇帝より、カムチ

ヤツカを征服せよと命じられた。

征服に向かったアトウラソフの行動は大胆だった。配下は、わずか六〇人のコザツク：それに同数のユカギール人。

彼等は、銃をもっていた。銃こそロシア人を象徴するもので、カムチャダール人たちはロシア人のことを「火の人」と呼んでいた。また、コザツクは四門の大砲も持っていた。

ピョートル一世(大帝)も大砲好きだったが、ロシア人の特徴は、あらゆる兵器の中でも、特に大砲を好んでいる。

一七〇一年、アトウラソフの征服事業が成功する。総面積三五万平方キロメートル：という広大な大地がロシア領土に加わった。わずか六〇人のコザツクと四門の大砲で手に入れた：まことに安上りだったとしかいえない。

その後、カムチャツカ半島に駐屯したコザツクの守備隊は、内紛を引き起こす、貧欲なアトウラソフを殺害し、各地の官毛皮倉庫を襲撃しつづけた。これはコザツクの部下にほとんど取り分がなかった

ために不満が暴発したのである。

当時、ロシア帝国は、シベリアに正規の大軍を駐留させる制度はまだ出来ていなかった。従ってカムチャツカに最も近いヤクーツク政庁が鎮圧に当たったが非力なため鎮圧に手こずってしまふ。

やむなく、コザツクの私的な副首長だったコズイリヨフスキーを正規の首長に任命し、やっと鎮静させることが出来た。

しかし、統制上、罰を加える必要があった、つまり、探険という強制労働に服せよ：ということであった。

強制労働の目標は「千島列島と日本辺境」の探索であった。以後、ロシアの千島列島についての接触は、江戸期の日本を心理的にゆさぶりつづけることになる。彼等、強制労働の徒が、懲罰的な探検に出発したのは一七一三年のことであった。

・ロシア、日本を知る：

(六)ロシアが日本を情報として知ったのは、一六七五年に清国に使いしたニコライ・

スパハリイという官吏である。スパハリイは、清国の隣に日本国というのがあることを知った。丁度、水戸光圀の在位時代のことだ。

しかし、このスパハリイの報告より詳しい報告が、カムチヤツカの征服者アトウラソフより皇帝に報告されている。

一六九九年、カムチャツカで原住民の捕虜になっていた一人の日本人漂流者に会い、その口から日本のことを聞いた。ただし「日本」という名ではなく、「エンド(江戸)」という名だった。

漂流者は伝兵衛といい、大阪の谷町の質屋「万九」の若旦那で、江戸から荷を輸送中、暴風に遭って船と共にカムチヤツカまで流されたのである。仲間は原住民に殺されたり逃げたりしたが、伝兵衛だけは助けられた。

伝兵衛は、彫りの深いギリシヤ人のような顔をした理知的で礼儀正しい青年だった。やがて、モスクワにつれていかれ優遇される。

ピョートル大帝に拝謁し、さらにピョートルの命令で、イルクーツクに最初の官立日本

語学校を開いた。伝兵衛がピョートル大帝に拝謁したのは一七〇二年(元禄一五年)赤穂浪士が討入りした年であった。

開校は一七〇五年、コズイリヨフスキーが千島探検に乗り出す八年前のことである。

・日本に関心をもった

ピョートル大帝

(七)伝兵衛に日本語学校を開かせたのも、また、コズイリヨフスキーという乱暴者に千島列島の探検をさせたのも、ロシアの中枢部が、日本というにわか知った一文明圏への関心のためであった。

当時のロシアの関心の中心は、清国に対すると同様、領土ではなく、シベリアの産物を日本に売り、日本からは食糧を買って、シベリア開発を容易なものにしたい：というところにあった。

ロシアが中国や日本に領土的野心を持たなかったのは、帝政時代のこの国の国家習性とかかわるもので、人口も多く、統治の整っている国に軍隊を派遣しようとしなかったし、また、遠征を可能にする条件

も持っていないかった。

ついでであるが、ロシアが西方に膨張する場合、相手の弱り目につけ入る…という出方で、国力を傾けるほどの力を入れて侵略したことは一度もない。

ロシアは、シベリアという広大な領土を得てしまったために、ここから得る利益と、その大きな陸地をかつぎ続ける重さに耐えるべく、さまざまに内政、外交の手段を講ぜざるを得なかったのだ。

彼等が、日本という見たこともない国に関心を抱いたのは、あくまでもシベリアという大きな陸地の維持と開発のためであった。

ピョートル大帝は、一七二五年に没している。しかしながら、最新までシベリアの開発に夢をはせ、日本に関心を持っていたといわれている。

「日本からの漂流民を見つけたら必ず、モスクワにつれてくるように」。これはピョートル大帝自身が発した命令で、この方針は歴代の皇帝に引きつがれた。

・女帝エカチェリーナの野望

(八)大黒屋光太夫(一七五〇〜一八二八年)たちも、カムチャツカ漂着後、この政治力学によって、女帝エカチェリーナ二世に拝謁し、やがて、日本との通商を求めるロシアの官船によって日本に送りとどけられた。

光太夫たちは、モスクワにすぐ連れていかれたわけではなく、途中、イルクーツクにとどまり、滞留させられている。光太夫が滞留した当時、一七八九年頃、国立日本語学校は、ロシア航海学校に付属していた。

このイルクーツク航海学校こそ、主としてシベリアの沿海で活躍する船乗りの養成機関だった。

いずれにしても、日本語学校が航海学校構内にあったということは、ロシアの日本への関心がいかに深かったかを物語っている。

女帝エカチェリーナ二世は、光太夫を日本に送り返すについて、当然のことながら日本と正式に交易をすべく、交渉使を派遣した。

使節は、若い陸軍中尉アダ

ム・ラクスマンで、資格はイルクーツク駐在の総督使者ということにされた。

一七九二年(寛政四年)、ロシア使節ラクスマンが根室に來航、光太夫引渡しと共に交易を要請する。しかし、幕府は鎖国である旨を通告し、頑迷に交易を拒否、結局、光太夫を降して帰途についた。

大黒屋光太夫は、その後、幕府の厳しい取り調べをうけ軟禁されている。女帝エカチェリーナ二世は、一八三〇年に没しているが、終生、ピョートル大帝の遺志を継ぎ、シベリアの維持と安定は、島国日本の扉をあけさせ食糧の供出を可能にするこ

とにありとして、イルクーツクに本社を置く露米会社の活動に力を入れた。

・レザノフの乱暴狼藉

(九)江戸期、日本を北方からおびやかして日本人に對口恐怖心を植えつける元になったものは、はたしてロシアの本質そのものだったのか、それとも露米会社のなりふりかまわぬ活動が、当時の日本人を惑わせ、それがあたかも口

シアの本質として印象されたのか…あるいは二者不離のものなのか、この辺りについては、今後、なお日ロ双方の歴史学者によって、より精密に研究されなければならないことだ。

とにもかくにも、ロシアが、シベリアとその経済的現象として延長線上にあるオホーツク海や北太平洋の島々から利益を上げようと、同時に、労働力不足と補給の面で、いちぢるしい困難と苦痛にあえいだことは確かである。その具体的な、あるいは象徴的な存在が露米会社だったことはまぎれもない。要するに、シベリアの補給問題、なかならずく食糧問題はロシアにとって恒常的な大問題だったのだ。

そういう大問題を解決するためにロシアは露米会社の代表者、ニコライ・ペトロビッチ・レザノフ(一七六四〜一八〇七年)をロシア使節として派遣している。一八〇四年(文化元年)のことだ。

しかし、このレザノフは「武装船二隻の威容を背景に日本と交渉し、国を開かせろ」という高圧的な態度…結果的に

その交渉は失敗に帰す。失敗したレザノフは、腹を立てて会社所属の船二隻に命じ、日本の北辺と樺太のクシユンコタンで略奪暴行を働く「フォストフ大尉事件」である。

フォストフは、その後、ロシア政府によって裁判にかけられているが、また、それに過剰に反応した日本側が一八一一年(文化八年)、侵略の意図をもたないロシアの軍艦ディアナ号の艦長ゴロニン少佐を捕まえて監禁、次いで翌年の一八一二年(文化九年)ディアナ号の副長リコルドとの交渉が決裂し、高田屋嘉兵衛がカムチャツカに連行される…という不祥事が発生している。

この作用と反作用という国家間の物理的現象は、歴史的条文さえ悪くそろえば、十分に戦争に誘爆していくべき事件だった。

その間、ロシアは海の国へと発展していった。商船は今日でもなお成熟しているとはいえないが、海軍の方は、着実に成長した。その成長ぶりは、日本の江戸後期、三度もヨーロッパから極東への世界周航

を試みるほど華やかなものだった。

ここで注目しなければならぬことは、この三大世界周航の目標が、三度も日本だったということである。

日本にとっての北方シベリアは、冬季の寒気団の発生地というだけで、何んの係わりもない。日本の関心(目)はいつも南に向いていた。要するにシベリア問題の中での「日本」というのは、ロシアの一方的な関心事であって、日本としては余り関心の持ちたくないよそごととして在りつづけてきたのである。

・スラブ民族(ロシア人)の

特性

(十一) シベリアに端を発した千島列島(クリーク諸島)をめぐってのこの両国の不幸な関係史は、その後、日露戦争、第二次世界大戦(太平洋戦争)をへて、今日なお「北方領土」問題として日・口両国間の懸案事項として横たわっている。「北方領土」問題は、日本側からいえば、北方四島は日本固有の領土であるとして千島列島に帰属しない……

という主張。一方、ロシア側からいえば、千島列島二一島は、ロシアの領土である。

一九四五年二月に行われた「ヤルタ会談」で米・英・ソ三国首脳の合意に基づくものという主張。確かに、

一九四五年(昭和二〇年)リヴェディアの保養地に集まったアメリカのルーズヴェルト、イギリスのチャーチル、ソ連のスターリン、三大国首脳は、「ヤルタ協定」の第三項目に、千島列島はソヴィエト連邦に引き渡されること、という一項目を設けている。

この会談には、中国の蒋介石も、また対戦国の日本も参加していない。あくまでも戦勝国側の一方的な戦後処理案なのだ、情け容赦があるはずがない。

戦後五〇年たった今、世界の情勢も大きく変わった。ここのとこに歴史に対する視点の難しさがある。只、歴史を振り返ってみた時、ロシア人の特性として、決して見逃してはならないことは、ロシア人は自分が一度獲得したものは自分のものという考え方の民族だということ。ローマ法

以来、占有権と所有権を区別して資本主義が発展してきたが、ロシア法典はこれを区別せず、占有イコール所有だと誤解している。従って、北方四島は自分たちが獲得した領土だから、自分たちのものだと考えているのだ。

東西冷戦に敗れ、経済戦争でもドイツや日本に敗れ、今また、領土を日本に奪われようとしている。

ロシアは内政的にも外交的にも極めて難しい局面に直面している。従って、今しばらくは静観している必要があるのではないだろうか。

いづれにしても、日・口両国の関係については、両国の専門家や学者が真剣に研究しあい、正常な関係改善を図る努力を共同で行われるべきだ、こういう努力が、今なお、行われていないということは、不思議なことというほかない。

繰り返すがロシアの千島進出の真意、そして本当の目的は何んだったのか、そして、その点を確認する努力もせず、いたずらに恐怖し、おびえ、ただ鎖国を盾に追い帰すことだけに終始した日本(幕府)

の対応。この部分の相違が両国間の最も大事な焦点なのである。

四 ロシアの南下に対する幕府の対応

・ロシアを必要以上に

怖れた幕府

(一) 千島の第一八島ウルツブ(得撫) 島には、一七七〇年(明和七年)ヤクーツクの毛皮業者プロトジャコフがやってきて、土地のアイヌを使つてラッコを獲った。アイヌたちは、この奴隷労働をきらい、翌一七七二年(明和八年)反乱をおこしロシア人二人を殺害した。

州藩の藩医の息子だったが、聡明さを見込まれ、仙台伊達家の藩医工藤丈庵の養子となつて江戸に住んだ。

江戸で漢学を学び、長崎通詞の長老吉雄耕牛や蘭学者前野蘭化から世界の動向を学んだ。また、松前藩の藩士とも交流が深いところから北方の地誌や情勢に明るくなつたものと思われる。ロシアの国名を「ヲロシヤ」と記し、言語、文化、地理、歴史等について、かなり詳しく記述している。

それによるとロシアの南下侵略については否定的、但し、警戒は必要だと述べている。

時の老中、田沼意次は、当時、執政晩節期を迎えていた。田沼とその側近たちは、何か後世に語り継がれるべき大きな仕事を残したい……という風潮にあった。そういった意味でいうなら、田沼意次という人物は、政治家として最も大切な後世意識をもつた人物だったことが分かる。用人を通して平助に打診があった。平助はこの著作を田沼意次に献上した。

意次は、この本に大いに触発され、大枚の予算をさき、組

この事件を知らされた松前藩や幕府の役人、知識人は動揺する。

『赤蝦夷風説考』というロシア南下を警告する本が出たのは、事件の一〇年後のことである。

著者の工藤平助(一七三四、一八〇〇年)は、歴史上では無名に近いが、すぐれた人物で、人間としても面白く、また、江戸中期以後の知識人の一典型ともいえる。平助は紀

織的な北方探検団を派遣して
いる。カムチャツカを征服し
たアトウラソフとその後輩た
ちの多分に粗暴な振る舞い
が、日本に強烈な反作用をお
こさせたのだ。対外的には鎖
国と称し、およそ鈍感な幕府

にあつては、めずらしく過敏
な反応だったのである。寛政
一二年（一八〇〇年）、八王
子同心子弟一〇〇人を蝦夷地
の警備として鶴川と白糠に派
遣する。しかし、この派遣は
整備不足と食料難のため失敗
に帰した。

文化四年（一八〇七年）幕府
は松前藩を奥州梁川に移封し
て蝦夷地を直轄領とし、エト
ロフ島（択捉島）を国防の第
一線として津軽藩と南部藩に
守備を命じた。

文化五年（一八〇八年）、仙
台藩、会津藩にも蝦夷地の守
備が命令される。この年、問
宮林蔵が問宮海峡を発見した。

・黒船渡来・列強の開国要求

（一）幕府の意図がどうあれ、
時代の潮流は大きくゆれ動き
出した：鎖国政策を頑固に執
着する日本に対し、世界の動
きは確実に日本に開港をせま

つてきたのである。嘉永四年
（一八五一年）、ペリーのア
メリカ艦隊が浦賀に來航、日
本国内は騒然となった。黒
船の渡来は、それまでの安
閑とした社会を一変させたの
である。

余談であるが、ペリーはもと
もと恫喝と威嚇こそ東洋人
（日本人を含む）相手には有
効だと認識し、その方針でや
つてきた。従つて、終始一貫
その方法を貫いている。まる
で西部劇のガン・マンのよう
に、いきなり江戸湾に突っ込
んできて、開港をせまった。

日本の対外応接慣習からいえ
ば長崎入港が当然で、將軍の
お膝元に乗り込んでくること
は言語道断だった。

しかし、ペリーはそれを十分
知りぬいてあえて江戸湾に突
入し、停泊し、いつでも江戸
を砲撃する姿勢をとつたので
ある。ペリーの予想どうり幕
府はあわてふためき、国内世
論も歴史始まって以来のパニ
ック状態におちいり、結局、

「和親条約」を結ばざるを得
なくなつてしまふ。

このペリーの外交的成功は、
「東洋人には恫喝と威嚇がき

く」という予想を見事的中さ
せてしまった。けだし、日本
にとつては決して名誉あるこ
とではない。

五 幕末における東北諸藩

・東北の悲劇「戊辰戦争」

（一）東北地方は、なぜ全般
的な近代化の動向から取り残
されたのだろうか。

少なくとも第二次世界大戦以
前の東北は、日本の後進地域
であり近代産業は立ち遅れ、
昭和初期まで飢餓と出稼ぎ、
そして身売りが見られる地方
とみなされていた。その要因

は、東北諸藩が西南の雄藩に
比べて天保改革（天保一二年、
一八四一年）の遂行を欠いて
いたことにつながっている。

内部から革新力を創出するこ
とに失敗し、財政は破局にお
ち入つていた。こうして東北
諸藩は明治維新に際し、明敏
な見透しと組織的な変革構想
を提起し得なかつた立ち遅れ
が致命的だった。

結果的に、戊辰戦争に敗れ、
心ならずも「賊軍」「賊地」
の汚名を着せられた上、広汎
な民衆の支持も得られなかつ

たところに、諸藩の士族、東
北の悲劇が始まつている。

（二）慶応四年（一八六二年）
戊辰の年は「鳥羽・伏見の戦
い」の戦塵の中で幕をあけた。
幕府軍・会津藩・桑名藩を破
つた薩摩・長州藩を中心とす
る西軍は、錦旗を押し立て「官
軍」と称して、一気に倒幕へ
となだれ込んだ。慶応四年一
月一七日、朝廷は、仙台伊達
藩に対し会津藩征伐を命ずる
と共に、他の奥州諸藩に対し
て仙台伊達藩への支援を命じ
た。

新政府樹立を目指す「官軍」
の行動は敏速だった。二月三
日、天皇親征の詔勅が発せら
れ、大総督が設置される。九
條道孝を総督とし、沢為量を
副総督、以下醍醐忠敬、大山
綱良（薩摩）、世良修蔵（長州）
を参謀とする奥羽鎮撫軍を編
成、三月一八日には仙台松島
湾に到着して仙台に入り、藩
校養賢堂を本陣とする。

参謀の世良は仙台伊達藩の会
津藩攻撃が遅いことを厳しく
糾弾し討会軍の出陣を命ず
る。しかし、仙台伊達藩は動
こうとしなかつた。

当時、仙台伊達藩の内部では、
会津藩への同情心が強く、平
和的解決を図ろうとする空気
が強かつたのである。鎮撫軍
の進駐によって、会津藩救済
の動きはにわかに活発化した。
三月二五日、仙台・米沢両藩
代表が会津若松で密会し、会
津藩に恭順の意を示させ、奥
羽鎮撫軍に会津藩の謝罪歎願
を周旋することと申し合わせ
た。一方、四月六日、秋田藩
に庄内藩征伐の命が下つたの
を契機に、共に「朝敵」とな
つた会津・庄内両藩は、四月
一〇日、同盟を結び、仙台・
米沢両藩に働きかけて、反薩
長連合を形成し、防禦から攻
撃へと姿勢を転じようとして
いた。

四月一日、江戸城開城。戦
局の舞台は完全に東北（奥羽）
に移つたのである。

・奥羽列藩同盟の結成

（三）閏四月一日、仙台・米
沢・会津三藩代表は「会津藩
謝罪案」について協議し、一、
会津城の開城、二、封土の削
減、三、鳥羽・伏見戦争の責
任者（重臣）三名の処罰、以
上の三条件をもつて合意する。
しかし、参謀世良修蔵が考え

ていた条件は、一、会津藩主松平容保の斬首、二、嗣子若狭の監禁、三、会津城の開城というもので、完全降伏を求める条件とは大きくかけはなれたものだった。

四月一二日、仙台・米沢両藩主より九條総督に「歎願書」が手渡されたが、世良修蔵の強硬な猛反対にあい、結局、却下されてしまう。世良は、この頃、奥羽諸藩が頼りにならないことを見抜き「奥羽皆敵」と断定、総督府に援軍の派遣を要請しようとしていた。歎願書を却下された仙台・米沢両藩は、会津、庄内境から兵を引き上げた。

四月二〇日、仙台藩士数名は、福島にいた世良修蔵の宿舎を襲撃し、世良を斬殺してしまふ、このことよって東北諸藩は奥羽鎮撫軍を交渉相手とすることが不可能となったのである。残された道は、只一つ、朝廷への直接建白だった。

(四) 建白書提出には、奥羽の総意・衆論の具体化がなされなければならない。そのためには、どうしても同盟が不可欠となる。そこで協議の上、奥羽列藩同盟が結成されたの

である。四月二二日、仙台藩白石支藩において同盟盟約書が作られ、四月二十九日、太政官あて建白書草案が審議された。草案では、薩長参謀らの極悪非道の行動を厳しく弾劾し、薩長の兵を「国賊」と決

めつけ「国賊追討」の命を奥羽諸藩に下すよう求めている。建白書及び契約書への調印が行われたのは五月三日である、調印したのは二五藩、五月六日に、北越六藩が加盟し、ここに奥羽越列藩同盟(三一藩)が成立した。同盟は、決して鎮撫総督府と全面対決することを望んでいたのではない。

何よりも鳥羽・伏見の戦い以後の、薩長による政権独占、徳川氏をはじめとする会津・庄内両藩への苛酷な処分、攘夷の欺瞞などに不満を抱いた東北諸藩が、君側の奸(薩長)を排除することを目指して結成されたものであった。しかし、情勢の急転回と共に、同盟は西の中央新政権に対峙する東の地方政権的色彩を強めていくことになる。輪王寺宮公現親王の同盟盟主へのかつぎ出しもその一つであった。

七月には仙台・米沢両藩主が総督に任命され、参謀には旧幕臣が就任した。白石城中に設置された軍議所には諸藩の代表が詰めかけ、軍略、治民、会計を評議した。

・醒めていた民衆の願いは「世直し」

(五) 東西両軍は、民衆の心を引きつけるために、いろいろ画策をめぐらしたが、むしろ民衆は冷静に両者の戦いの帰すうをうかがい、自主的に行動しようとしていた。

内乱(内戦)によって被害をこうむり、苦しむのは結局自分たちであることを十分承知していたからである。幕末の農民一揆で名高い指導者、伊達郡金原田村の菅野八郎は「日本人同志、軍をすること暗愚蒙昧というべし、早く、それぞれ改心して軍をやめ、万民の苦しみを救いたまえ」と述べている。また、「御一新の大義を思えば、あまねく天下にご人徳をしき、万民の心を得ることが大事」と主張している。八郎にみられる「御一新」への期待と不安は、慶応四年一〇月の会津一円

「ヤアヤア一揆」のように「世直し」を求める大規模な決起へと農民を駆り立てていったのである。「戊辰戦争」は、幕藩制国家に変わる新しい統一国家のあり方をめぐっての、相違な構想をもった政治勢力が激突した戦いであった。ひっぱくした政治情勢と目まぐるしく移り変わる世相の中で、短期間に同盟への結集を余儀なくされた東北諸藩は、自らの政権構想を具体的な形で提示出来ないまま敗北していった。

・「戊辰戦争」の攻防と友藩の裏切り

(六) 白河は古代から東北の関門とされ、戊辰戦争でも北上する西軍(官軍)が大平口・勢至堂口から会津に攻めこむための要地であった。

白河口の攻防は、戊辰戦争最大の激戦で、その勝敗はこの戦争全体に大きな影響を及ぼした。白河城攻防を前にして、仙台伊達藩は西軍(官軍)を国賊とみなすことと藩論で一決、ただちに仙台・棚倉両藩の兵が会津軍支援のために入城している。五月一日、戦闘

が開始された。初めの段階では互角だったが、寄せあつめの軍で統一的な訓練と作戦計画に欠けていた東北連合軍は、京都や関東で豊富な実践経験をもつ西軍を防ぎ切れず、大敗を喫してしまう。東北軍は、その後、再三に亘って白河城奪還を計ったがついに攻略することは出来なかった。結果的にみて、この白河口の攻防の勝敗が「戊辰戦争」全体の勝敗を決したといつていい。東北諸藩の見透しにいささか甘さがあったのである。

(七) 三春藩が列藩同盟から脱盟し、西軍に帰順したのは七月二六日のことだった。いわゆる裏切りである。このため西軍との戦いで二本松藩は援軍と信じていた三春藩に背後から銃火をあびるはめとなった。二本松藩は、二九日に落城してしまう。城を守っていた留守部隊は、六〇才以上の老兵と十二〜十八才の少年隊だけだった。少年たちは、青や赤の陣羽織、引きづるような太刀を腰にして、「子供隊長ト思ウ敵ニ身体デ刺セ」と、出陣の朝、母から教えら

れたとうり忠実に実行して倒れていった。

(八) 九條総督・沢副総督ら西軍約一二〇〇名の進駐で威圧をうけた秋田藩では、三日間の重臣会議の末、七月四日、同盟を離反、庄内藩討入りを決定する。併せて、総督に先鋒としての出陣を申請した。その日、秋田藩監視の仙台伊達藩使節一名のうち、六名が秋田藩勤王派の藩士に斬殺されている。この秋田藩の裏切りは奥羽越列藩同盟にとつて大きな誤算となり、痛手となった。

(九) 会津藩と共に「朝敵」の筆頭にされた庄内藩だが、「朝敵」とされた根拠は、しごくあいまいだった。藩主酒井忠篤の支配下にあった旧新徴組浪士たちによる倒幕運動の弾圧、慶応三年(一八六七)二月の庄内藩による江戸薩摩藩邸焼打ち事件により、庄内藩は薩長の怨みをかうことになった。しかし、この焼打ち事件の背後には、江戸市中の混乱を計った薩摩の挑発があった：といわれている。当時、庄内藩の軍事体制は、東北諸藩の中でもっとも進ん

でいた。

正規軍の外、農兵、酒田の町兵、鶴岡の商兵が組織され、御用商人酒田の本間家を通してオランダ商人スネルから最新の武器を輸入していた。

庄内男児はナ ワランケ(ワラの服)着たとてもナ戦をさせれば鬼じやものいも(薩摩)やばたまち(おはぎ)萩(長州)ひとかじりだ」と歌われていたように、庄内軍の活躍ぶりはめざましいものだった。特に、秋田戦争では、西軍・秋田軍の連合軍を完全に押しまくり、九月には秋田城攻略まであと一歩に迫る勢いを示している。

・親藩会津の悲惨

(十) 「戊辰戦争」で敗北を喫した会津藩は、奥羽列藩同盟の中で最も悲惨な処遇を受けた藩だ。会津藩の家訓は、「大君(将軍)の儀は一心に大切に、他の大名の立場とは違ふ」という主旨のことが記されている。会津の初代藩主である松平(保科)正之が「宗家(将軍家)を頼む」と言いのこして死去した時、

この言葉が家訓になった。以来、会津藩は徳川幕府の中核大名として、代々引き継がれてきたのである。

会津藩と蝦夷地との係わりあいは、幕末の安政六年(一八五九年)九月、東蝦夷地(オホーツク海沿岸・現在の道東地区、紋別一帯と斜里・標津を含む知床半島一帯)を藩領として正式に幕府から与えられ、北辺の開発警備に当たったことにはじまっている。それまで会津藩は幕命で文化五年(一八〇八年)に樺太(当時は唐太といった)で狼籍を働くロシアのフォストフ大尉らを鎮圧するため出兵。また、文化七年(一八一〇)から文化三年(一八二〇)までの一〇年間は、三浦半島を中心とする海岸警備をし、さらに、弘化四年(一八四七年)から嘉永六年(一八五三年)までの六年間は、上総(千葉県)の富津・竹岡に本陣を置いて江戸湾の警備についている。ペリーの黒船艦隊が浦賀沖に来航した時には、その対岸の房総を守っていて会津藩水軍が活躍したのを「黒船来航」

の絵草紙の中に記載されている。さらに、その年、房総警備から品川第二砲台に移されて江戸湾全体の警護に当たったのであった。

藩水軍の武装力は極立ったものであった。

・「京を戦場として死のう」

君臣の信頼

(十一) 藩主松平肥後守容保は、会津松平氏第九代の藩主だった。高須藩主松平義建の六男として、天保六年(一八三五年)、江戸四谷の高須藩江戸屋敷で生まれている。幼名銚之允(けいのすけ)。

会津藩松平家に世継ぎがなかったため尾張藩の分家である美濃高須の松平家の容保が選ばれた。丁度、一〇才の時のことである。容保は、容姿端麗で、律儀。物事に妥協を許さぬ心の強さを秘める徳川三〇〇年が丹精込めて磨き上げ、造り出した武家社会の芸術品のような若者だった。容保が京都守護職を引き受けるにいたった経緯は、土佐藩

主山内容堂が藩祖山内一豊が徳川家康から受けた恩を忘れることができず、徳川慶喜を救おうと動いたことに似ている。

京都守護職とは、浪士たちがばつこする無法地帯と化した京都を収め、秩序を取り戻す役目で、いわばFBI長官でもあり、憲兵本部長のようなもの：評判の良くなるわけがない、損な役回りであった。家臣たちは、この任務を引き受けてはならないと強く進言したが、容保は押し切った。容保は家臣を集め「京を戦場として死のう」と告げた時、君臣は抱き合って慟哭したという。

・松平容保を

信頼していた孝明天皇

(十二) ひとたび、京都守護職を引き受けたからには律儀な容保、不穏分子には容赦しなかった。「新撰組」を結成して徹底的に取締りに当らせる。この新撰組が奮迅すればするほど、容保の世間像が奇妙に歪んでいった。最初、近衛閑白をして感嘆せ

しめた柔和で気品のある、どちらかといえは弱々しい印象が、世間で受けとめられていたこの若者の像であったが、それが一変した。

容保自身は気付かなかったが、世間の容保像に鬼相を帯びはじめた。

「会津中将は血に飢えた鬼畜である」と噂される。特に長州藩士や長州系の浪士たちはそう見、また、それ以外の角度から容保を見ようとはしなかった。

容保の不幸は、この時にはしまったのである。

幕府が倒れた後の「戊辰戦争」敗北で、容保は辛酸をなめた。

薩長は会津藩を完膚なきまでに叩きのめした。これでもか、これでもか：といわんばかりの苛酷な仕打ち、そして、現在の青森県下北半島の斗南に追いやった。

明治二五年（一八九二年）、容保は五九才で没している。容保の残した詩の中に、徳川慶喜のことを「大樹」と表し、なぜ自分のような「枝」をなげうったのかと責め、また、「万死報国の志いまだとげず」で自分の仕えた天子、孝明天

皇の恩に報いられなかったことを悔いている。容保が死ぬまで首にかけていた竹筒があった。他界した時、遣臣がその竹筒をどう始末するか話し合った。竹筒の中には意外にも、二通の手紙が大事にしまわれてあった。

孝明天皇が容保に宛てた手紙で、一つは、彼の忠誠を喜び、無二のものと思うと書かれてあり、もう一つは長州とその関係者である公郷たちを奸賊として罵倒してあった。この竹筒の存在を知った長州藩出身の明治の元勳である山県有朋は「捨ててはおけぬ」として買い取り交渉をしてくる。維新史における長州藩が、のちに、どのようにいわれるかと心配したのだ。だが、松平家は応じなかった。今、その竹筒は、東京銀行の金庫の中に眠っている。

・会津藩、無念の降伏

(十三) 会津開城について述べよう

鳥羽・伏見の戦いに敗れた容保は、慶応四年一月六日、徳

川慶喜と共に大坂城を脱出。江戸を経由して二月二二日に会津へ帰った。

容保は早速藩士一統への諭告を出して「武備恭順」の姿勢を明確にすると共に、三月に入ると軍制の洋式化を断行した。

朱雀隊（一八〇三五才）

約一二〇〇名

青龍隊（三六〇四九才）

約九〇〇名

玄武隊（五〇才以上）

約四〇〇名

白虎隊（一六〇一七才）

約三〇〇名

朱雀隊は実践機動部隊、青龍隊は国境守備隊、玄武・白虎隊は予備隊だった。

以上の外に砲兵隊、遊撃隊を加えた約三〇〇〇名が正規軍で、これに町農兵約三〇八〇名、猟師隊、修験隊、力士隊を含めて会津の全兵力は約七〇〇〇余名であった。

軍制の洋式化は、外国人商人より購入した鉄砲装備と旧幕府指南役によるフランス式訓練の導入だったが、情勢の切迫と資金不足のため、十分な訓練が出来なかった。

八月二〇日、西軍が三方より

進攻してくる。西軍約二〇〇〇名。八月二一日、母成峠で激突する。大鳥圭介の卒いる伝習隊と二本松・仙台藩の同盟軍は敗北、翌二二日も同盟軍は敗北した。

二三日、西軍は会津若松に進入、白虎隊が奮戦したが敗れ、飯盛山で自刃した。

この日から九月二二日まで一カ月間、会津軍は籠城する。

西軍の援軍は日増しにふくれ上り、三万余に達していた。

市内では略奪、惨殺、暴行が繰り返りひろげられた。

八月二六日、小田山が西軍に占領され、アームストロング砲が天守閣めがけて火を吹いた。城内は負傷者があふれ、女性たちが看護に当たった。

八月二八日、米沢藩が降伏。

九月一五日、仙台伊達藩が降伏。

九月一七日、庄内藩が降伏する。

会津藩の必死の闘いも、もはや限界に達し、九月二二日、ついに西軍の軍門に下った。

開戦時の会津藩の兵員は約四、九五〇余名。うち三割が女性、老若、少年だったとい

われている。

余談だが、箱館（現・函館）に集結していた榎本武揚らの旧幕府軍は、明治二年（一八六九年）三月二五日、宮古湾の海戦で西軍艦隊に敗れ、維新の内戦も終りに近づいていった。

・不毛の地、斗南（下北）へ

(十四)「戊辰戦争」に敗北し、領地を没収された会津藩に藩再興の許可が出たのは、明治二年（一八六九年）九月のことである。

これ以前に、朝廷から会津松平家の再興について猪苗代または陸奥の北部に三万石を賜わる旨の内意があった。下北への移住か地元への残留か、藩士の間で議論が沸騰した

時、「今日の急は糊口の路を開く」にあり、故郷の地に恋々する時にあらず」と昂然と北遷説を主張したのが、山川浩

永岡久茂、広沢安任らであった。

斗南藩は、現在の下北地方と、一部岩手県北部に分かれる地、三万石の藩として成立した。藩主は松平容大である。

この僻地は、寒冷の地で実質上、七〇〇〇石にも満たない

不毛の地であった。

「北斗以南皆帝洲」という中国の詩文よりとったといわれる「斗南」の藩名には、北辺の地に居住しても、共に北斗七星を仰ぐ帝国の民であるとの気概が込められていた。

この不毛・寒冷の地に、一七、〇〇〇余人、戸数四、三〇〇戸の藩士たちが陸路・海路をとって移住したのである。

地元の人たちでさえ日々の生活が容易でない土地にへ大挙移住してきた斗南藩の生活は、正に悲惨の一語につきた。誇り高き会津武士の上に、「ゲダカ（下北地方の方言で毛虫のこと）土族」「ハド（鳩）侍」の言葉が投げつけられる。土地の人の知らない山菜まで採り、馬に食わせる大豆カスや豆腐カスを食べる藩士らへの蔑称だった。

粗悪な食料、厳しい気候風土のため病人が続出した。移住者の約一割が病人であったと記録されている。わずかの扶持米さえも放棄して脱藩者が相つぎ、生活のためには士族の身分も放り投げ、地元の地主の娘に婿入り

する者まで現われた。

やがて、廃藩置県となり斗南藩は斗南県となり、そして、青森県に合併されていく。

しかし、会津という地から下北という苛酷の地に移された藩士とその家族にとつて、斗南での暮しそのものは、やはり、極めて厳しく、つらいものだったのである。

多くの仲間が去っていく中で、斗南藩少参事だった広沢安任は、最後までこの地に留まり、北村豊三、佐久起らと洋式牧場の経営に尽力し、会津武士の意気地を示した。

また、広沢安任は、北海道開拓に向う屯田兵志願者に対し、激励の辞を贈ると同時に、「蝦夷松前（当時、北海道のこと）をこう呼んだ」に行つても、決してへこたれるな、会津武士の魂をもって事に当れ」と力づけている。

明治新政府の策定した「屯田兵制度」に会津藩（斗南藩）から志願した者は、ごく限られた少数に過ぎない。

親類縁者の中には、「何が悲しくて蝦夷地に行かなければならないのか」「やめろ、絶対に行くな」

等々、猛反対した人も多かった。しかし、屯田兵志願者それぞれの決意の固さを知ると、水盃で今生の別れを交わし、集合地まで見送ったといわれている。

・奥羽諸藩は「賊軍」にあらず（十五）会津の人たちにとつては、「戊辰戦争」の屈辱は、今だに忘れられないものになつていないのだろうか。

やりたくもない京都守護職をやらせられ、武士らしく任務を忠実に実行した結果、薩長から蛇蝎の如く憎まれ、戊辰戦争では友藩に裏切られ、女子供まで殺されて、挙げ句の果てに本州の北端に追いやられ、辛酸をなめさせられた歴史は、忘れようにも忘れられないものと思われる。

それだけではない、徳川三〇〇年が作り上げた名木のような会津武士道精神が、薩長によつて、まるでチリ、アクタのように扱われ焼き払われ、その誇りすら足蹴にされた。「許せない」という訳だ。

歴史というものが、事実の羅列ではなく、人間の解釈だとするなら、徳川三〇〇年の歴

史も見直され、慶喜や容堂、容保もまた見直されるに違いない。

例えば、初めから徳川三〇〇年をどのようにして滅亡させたかを念頭において行動した大戦略家の徳川慶喜、慶喜と見事な連携プレーを演じ切つた山内容堂。

滅びると知りながら会津武士の意地をひたすら貫くことに美学を見い出そうとした松平容保など。

過去は現在に向つて、そうやって復讐する。歴史とは大小さまざまの復讐の繰り返しなのかも知れない。

今、奥羽諸藩の団結に対し、新しい視点が当てられている。「賊軍」、「賊地」ではなかったという視方だ。

政治勢力の激突であり、日本という国体を考えた時、やむにやまれぬ措置だったということである。特に、会津藩の松平容保の苦衷は、改めて理解され、会津は「賊軍」とはいえないとする見解である。

・不屈の抵抗心と精神力（十六）東北は、半年に及ぶ

「戊辰戦争」で山河は血塗られ、街は焦土と化した。

古来、「化外の民」「まつろわぬ人々」として恐れられ、この地を征服せんともくろむ者には手ひどい打撃を加えずにはおかなかつた誇り高き東北人の血は、「戊辰戦争」においてもいかに発揮された。

錦の御旗を押立て「官軍」を標榜する西軍に対し、抵抗なく屈することを潔よしとしなかつたのである。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」敗戦による挫折感の上に、「白河以北一山百文」の蔑称が投げつけられる。ともすれば、頭をもたげる卑屈な心を必死で押えられたのは、歴史の中で培われてきた東北人の不屈の抵抗心であり、逆境をも乗り越こえる精神力であった。この精神力が東北再起への源泉ともなったのだ。

「戊辰戦争」に敗れた東北を待っていたものは、敗者への冷酷な処分だった。

奥羽随一の大藩で列藩同盟の盟主であつた仙台伊達藩六二万石は二八万石に、米沢藩一五万石は一一万石に、南部藩二〇万石は白石藩に移封

の上、二三万石に減封された。薩長の目の仇にされた会津・庄内両藩への処分は、庄内藩（一四万石）が西郷隆盛・黒田清隆ら西軍指導者の寛容な態度と、藩の重臣らの働きが効を奏し、賠償金のみ没収という比較的寛大なものであったのに対し、最後まで抗戦しつづけた会津藩の処分は、城地（二〇万石）没収の上、新たに奥羽の最北端、不毛僻地の下北斗南への移住という苛酷きわまるものであった。

厳しい処分を受けた東北諸藩にとつて、明治二年（一八六九年）の版籍奉還、明治四年（一八七一年）の廢藩置県は、さらにいっそうの苦闘を強いるものとなった。明治三年（一八七〇年）、家禄を失った伊達藩の巨理・岩出山・白石ら支藩の士族らは、北海道の移住開拓に生きる望みを託し、津軽海峡を渡った。彼らの血と汗と涙の努力が、今日、伊達や札幌市白石区などで結実している。

「戊辰戦争」をくぐり抜けた東北人にとつて「御一新」は額面通りに受け入れられるべきものではなかった。「御一新」は結局、薩長の独裁を現実させただけであるという不信感がつきまとつていた。また「御一新」に裏切られたのは、士族だけではない。藩政時代の苛酷な収奪と官吏の不正を自らの行動で打破しつつあつた農民も「御一新」に期待し裏切られていく。結果的にみて、明治新政府による東北への政治的、経済的差別の態度は、東北人をして事あれば反政府運動へと駆りたてる傾向を生んでいった。

新は結局、薩長の独裁を現実させただけであるという不信感がつきまとつていた。また「御一新」に裏切られたのは、士族だけではない。藩政時代の苛酷な収奪と官吏の不正を自らの行動で打破しつつあつた農民も「御一新」に期待し裏切られていく。結果的にみて、明治新政府による東北への政治的、経済的差別の態度は、東北人をして事あれば反政府運動へと駆りたてる傾向を生んでいった。

明治一〇年（一八七七年）、反政府運動は、自由民権運動に受け継がれる。武力に代る言論が政府攻撃の手段となつた。全国的にみて、東北ほど常に地域的団結を重視し、一丸となつて運動を展開しようとする努力した地域は他にはない。ここるところに、奥羽列藩同盟を結成した東北人の氣質が窺える。

主な東北諸藩（幕末期）の概要
津軽黒石藩
黒石（青森県黒石市）外様
藩主 津軽本次郎承叙（のぶみち）
家禄 一〇、〇〇〇石
実高 一三、二五一石八斗

弘前（青森県弘前市）外様
藩主 津軽越中守順承（ゆきつぐ）
家禄 一〇〇、〇〇〇石
実高 二七四、四八三石
家臣 士 一、〇六六戸
卒 二、二六一戸
人口 二七八、八四二人
南部七戸藩
七戸（青森県上北郡七戸町）
外様
藩主 南部丹波守信方（のぶかた）
家禄 一一、〇〇〇石
実高 一〇、三八四石六斗
四升
家臣 士 二四〇戸
卒 五〇戸
人口 一五、五二七人
南部八戸藩
八戸（青森県八戸市）外様
藩主 南部遠江守信順（のぶゆき）
家禄 二〇、〇〇〇石
家臣 士 三七〇戸
卒 二〇〇戸
人口 六七、六四七人

田村一関藩
一関（岩手県一関市）様
藩主 田村右京太夫崇顕（たかあき）
家禄 三〇、〇〇〇石
実高 三〇、三四七石三斗七升
家臣 士 三三三戸
卒 二八五戸
人口 二六、一二三人
南部盛岡藩
盛岡（岩手県盛岡市）外様
藩主 南部美濃守利剛（としひさ）
家禄 二〇〇、〇〇〇石
実高 一六〇、九二三石九斗
家臣 士 六一〇戸
卒 一、〇四二戸
人口 一一七、五二七人
仙台伊達藩
仙台（宮城県仙台市）外様
伊達家は、大広間二の間の際、西側の南に寄りたる襖の際に、南向きに座を占め、それより諸大名が順次、北に北にと相並びて着座する。即ち、大々名の地位にあり。一〇〇万石の前田家につぎ、薩摩の島津家と同格に列せられた。慶長一三年、政宗の時、松

平の称号を賜り、以後代々松平を称す。
藩主（伊達）松平陸奥守慶邦（よしくに）
家禄 六二五、六〇〇石
実高 六七〇、〇〇〇石余
家臣 士 四、六六二戸
卒 三、〇五〇戸
人口 二三八、八九三人
佐竹秋田新田藩
秋田新田（秋田県）外様
藩主 佐竹左近将監義理（よしさと）
家禄 二〇、〇〇〇石
家臣 士 一七一戸
卒 九八戸
人口 一七、三九七人
久保田（秋田県秋田市）外様
藩主 佐竹次郎義睦（よしちか）
家禄 二〇五、八〇〇石
実高 三三二、〇三八石
家臣 士 三、三一九戸
卒 一、九七七戸
士族下部
一、一三一戸
人口 四三五、二六七人
※幕末、奥羽列藩同盟から離反し減禄をまぬがれた。岩城亀田藩

岩城亀田藩
慶長一三年、政宗の時、松

亀田(秋田県由利郡岩城町)

外様

藩主 岩城伊予守隆邦(た

かくに)

家禄 二〇、〇〇〇石

実高 一九、九〇四石

家臣 士 一三三〇戸

卒 三〇一戸

人口 一九、一一三人

六郷本庄藩

本庄(秋田県本庄市) 外様

藩主 六郷筑前守政殿(ま

さただ)

家禄 二〇、〇二石

実高 二七、二二三石

家臣 士 一四二戸

卒 三一戸

人口 一八、四二〇人

松平藤井上山藩

上山(山形県上市市) 譜代

藩主 松平(藤井)山城守

信安(のぶやす)

家禄 三〇、〇〇〇石

実高 二八、四〇九石

家臣 士 一二二戸

卒 一四七戸

戸沢新庄藩

新庄(山形県新庄市) 譜代

藩主 戸沢上總介正実(ま

さざね)

家禄 六八、二〇〇石

実高 一〇三、四三四石

家臣 士 五二二戸

卒 七六〇戸

人口 四七、四〇五人

酒井鶴岡藩

鶴岡(山形県鶴岡市) 譜代

藩主 酒井左衛門尉忠宝

(ただみち)

家禄 一七〇、〇〇〇石

実高 一二〇、〇〇〇石

家臣 士 九三〇戸

卒 九三〇戸

人口 七九、九三四人

織田天童藩

天童(山形県天童市) 外様

藩主 織田兵部少輔信敏

(のぶとし)

家禄 二〇、〇〇〇石

実高 二一、一五六石四斗

家臣 士 一三二戸

卒 一二九戸

人口 三二、二二一人

米津長瀨藩

長瀨(山形県東根市) 譜代

藩主 米津啓次郎政易(ま

さやす)

家禄 一一、〇〇〇石

実高 一二、四二五石五斗

家臣 士 六一戸

卒 二六戸

酒井松山藩

松山(山形県飽海郡松山町)

譜代

藩主 酒井大学頭忠良(た

だよし)

家禄 二五、〇〇〇石

実高 二六、八〇〇石一斗

家臣 士 一一八戸

卒 三三六戸

人口 不明

水野山形藩

山形(山形県山形市) 譜代

藩主 水野大監物忠精(た

だきよ)

家禄 五〇、〇〇〇石

実高 五〇、五八〇石八斗

家臣 士 二七二戸

卒 四〇一戸

人口 三五、八七四人

※山形水野家は、家康の生

母お大の方の生家、結城水

野家の分家で、代々の当主

は幕府重職が多い。天保改

革の水野忠邦は著名。

米沢藩

米沢(山形県米沢市) 外様

藩主 上杉弾正大弼齊憲

(なりのり)

家禄 一八〇、〇〇〇石

実高 二八四、七四八石七

家臣 士 一八、四二五戸

卒 三、三〇八戸

人口 一二七、二七七人

※越後の大々名。長尾景虎

(上杉謙信)よりの名家で

ある。

関ヶ原の合戦で徳川家に抗

したが、戦役後は許されて

米沢三〇万石となる。のち、

綱勝の時、一五万石となる

も、上杉鷹山の善政で三万

石の加増をうけ、戊辰戦争

で四万石を減じられた。

会津藩

会津(福島県会津若松市)

徳川一門

藩主 松平(保科)肥後守

容保(かたもり)

家禄 二八〇、〇〇〇石

実高 三四〇、〇〇〇石余

家臣 士 四、二二二戸

卒 四、一〇九戸

人口 二一四、〇一七人

※会津松平氏は、徳川秀忠

の子息正之が保科家を継

ぎ、元禄九年に松平姓とな

る。併せて、葵の御紋を許

される。

代々、会津城に居住し、幕

府の信任極めて厚かった。

戊辰戦争の敗北で、東北諸

藩の内最も悲惨な境遇とな

る。

泉(福島県いわき市) 譜代

藩主 本多越中守忠伸(た

だのぶ)

家禄 二〇、〇〇〇石

実高 一九、五四二石五斗

家臣 士 二〇九戸

卒 五一戸

人口 九、六〇三人

安藤磐城平藩

磐城平(福島県いわき市)

譜代

藩主 安藤長門守信勇(の

ぶたけ)

家禄 三〇、〇〇〇石

実高 二九、九三九石八斗

家臣 士 三〇二戸

卒 一九五戸

人口 一六、三三九人

立花下手渡藩

下手渡(福島県伊達郡月舘

町) 外様

藩主 立花出雲守種恭(た

ねゆき)

家禄 一〇、〇〇〇石

実高 一一、九九七石三斗

家臣 士 一二三戸

卒 六三戸

人口 八、九六一人

阿部棚倉藩

棚倉(福島県東白川郡棚倉

町) 譜代

藩主 阿部播磨守正功(ま

さ(と)

家禄 一〇〇、〇〇〇石

実高 六〇、〇〇〇石

家臣 士 六八九戸

卒 二二三戸

人口 二六、七五六人

相馬中村藩

中村(福島県相馬市) 譜代

藩主 相馬大膳亮誠胤(と

もたね)

家禄 六〇、〇〇〇石

実高 八三、八〇九石

家臣 士一、九三七戸

卒 五五四戸

人口 六三、八九三人

丹羽二本松藩

二本松(福島県二本松市)

外様

藩主 丹羽左京大夫長裕

(ながひろ)

家禄 一〇〇、七〇〇石

実高 一一〇、四〇〇石余

家臣 士 七一一戸

卒 四一九戸

人口 二八、四二一人

板倉福島藩

秋田三春藩

松平守山藩

内藤湯長谷藩

溝口横田藩

護国神社祭り

平成二六年六月一日(土) 一一時

神社境内

護国神社には、山鼻神社碑、屯田兵招魂之碑等、屯田ゆかりの碑があります。護国神社参拝のおりには、お参りください。

山鼻神社碑

山鼻屯田兵の守護神として明治二十三年五月、南三十二条西十三丁目、西屯田の南端に建立され、境内は約百五十坪、松・桜・柳などがあつて風景を添えていたが、昭和四十六年五月一日、山鼻神社の神霊を札幌護国神社多賀殿の相殿にお迎えして御奉斎申し上げ、山鼻地区の守護神として御鎮座いただいて、その御奉斎の砌に天照皇大神宮さまを御合宣祀されている。

屯田兵招魂之碑

建立 明治十一年二月
碑筆者 従四位勲二等陸軍中將 山田顯義
場所 札幌護国神社 彰徳苑

明治十年の西南戦争に従軍した、屯田兵第一大隊(琴似・山鼻屯田兵)戦没者の偉勲を

称え、明治十一年に両兵村によつて建立された。明治十年

二月、征韓論に敗れた陸軍大将西郷隆盛は鹿児島にて

一万五千の兵を挙げて叛乱を起こした。開拓使長官で陸軍

中將を兼ねていた黒田清隆の命令で四月十日、屯田兵第一

大隊(琴似兵村第一中隊・山鼻兵村第二中隊で編制)の出

征が決定し、派遣屯田兵部隊は十五日、汽船太平洋丸で小樽

を出航、九州熊本に直航した。屯田兵部隊は、山田顯義少將

の指揮する別動第二旅団に配属され、旅団の企図している

人吉方面の進撃に参加する事となつた。屯田兵部隊は、肥

後小島町から宇土、小川を経て八代町に集結、万江越道方

面を担当した屯田兵部隊は五月十七日より攻撃前進を開

始。部隊は西郷軍を撃破しつ

つ八月一日の一ノ瀬川の戦闘は屯田兵部隊として最大の激

戦となつたのである。この激戦を観戦していたある

参謀が「屯田兵部隊の負傷者下士・兵卒に多く、将校に負

傷者がいないのを不審に思っていたが、今日の戦闘を見て

で将校でない事がやつと判つた」と語っている。

屯田兵の戦闘は指揮官の号令がないのに兵卒同士が巧みに

展開して戦いを有利に運んで

いた、それもその筈、彼ら屯田兵下士兵は、旧会津藩士・

仙台藩士・庄内藩士で占められ、十年前の戊辰戦争で、薩

長軍と戦闘した経験があつたのである。

八月二日の高鍋旧城下への攻撃を最後に、戦線縮小により

屯田兵部隊は第一線から退き、戦争の終結を待たずに八

月二十一日鹿児島到着、同地に三週間滞在して九月三十

日、札幌に凱旋。碑の表文は、有栖川宮職仁親

王の揮毫であり、碑の裏は陸軍中將山田顯義が揮毫し、こ

の戦いで倒れた三十七名の屯田兵士の名前が記されている。

財団事務局からのお知らせ

「広報」第二号を発行いたします。

山鼻屯田の歴史を、一般にも広く再認識していただくことと、財団の事業、特に記念式典に、一般の方に御参加いただくことが目的です。この広報が参加の一助となれば幸いです。

山鼻屯田、山鼻地区の昔話、思い出、あるいは山鼻小学区、山鼻公園等についての投稿をお待ちいたします。紙面で紹介します。また、財団事業、財団運営に御意見があれば、お寄せください。

事務局

064-0914
札幌市中央区南14条西9丁目2-13
電話・FAX 011-512-5020
e-mail yamahanakinenhi@pony.ocn.ne.jp

展示室

火・木曜日 10時から12時
土・日曜日 10時から15時